

大学教育とキャリア形成～あるいは矛盾としての教育

教育学部

教授・笹沼 弘志

よー、そこの若いの  
俺の言うことをきいてくれ  
「俺を含め、誰の言うことも聞くなよ。」

学生の皆さんも一度は耳にしたことがあるだろう。頭にタオルを巻いて汗だくで、つばを飛ばしながら歌う竹原ピストルの詩である。なんてでたらめな歌詞だと思うかもしれないが、実は教育の本質をズバリ言い当てたものである。特に大学教育の真骨頂はここにあるといえよう。

いったい大学とは何なのか、大学がなぜキャリアサポートに取り組まねばならないのか。その根本的な疑問に答えるためには、そもそも教育とは何かを考えねばならない。

教育とは相手方に働きかけながら、働きかけられた客体が、働きかけた者を含め、どんな他者へも依存せず、自ら考え判断し、行動する主体となることを目的としている。働きかけられた受動的な存在が主体的になることを目指す矛盾的営為である。

これを逆の立場、学習者の側からみれば、次のようにいうこともできよう。誰でも主体的に考え判断するためには、他者の声を聴く必要がある。とりわけ自分自身について考える場合には、他者の意見に耳を傾けねばならない。なぜなら、人間はうぬぼれなので自己自身について適切な評価ができないからだ。古代ローマ時代のギリシア人医学者ガレノスの金言である。

しかし、受動的な存在がどのようにして主体的に考えることができるようになるのだろうか。ドイツの哲学者カントは、「啓蒙とは何か」の中で、他者に依存し自らの理性を使用しようとしないう未成年状態にある者が未成年状態から脱する方法は何か、面白い議論をしている。

カントがすぐに出す答えは、未成年状態にある者に対して「理性を使う勇気を持つ」という叱咤激励だ。しかし、はたしてそれで理性を使う勇気もてるのか。他者に支えてもらい依存している状態で、一人で歩き出す勇気が持てないとき、勇気を持たない自分が情けなく、惨めな状態で、自己不信に囚われ絶望しているとき、頑張れ、勇気をだせとハッパ

をかけられて勇気ができるものなのだろうか。そんなに簡単ならば、直ちに啓蒙の課題は達成されてしまうだろう。カントはそんな単純な思考しかしてなかったのだろうか。

実は、その後の展開がある。カントは、啓蒙を達成するためには、理性を自由に使うことができればそれでよいという。しかし、理性を使う勇気を持ってない人々ばかりの状況では可能か。少し、丁寧にカントの議論を確認しておこう。理性の使用には私的な使用と公的な使用とがあるという。私的な使用とはいろいろな職業上の役割に応じて定められた範囲内で理性を使うことだ。市役所の市民税担当職員が税の徴収を行うときの理性の使用が私的な利用だ。これに対して公的な使用とは、職業上の役割を離れて、「ある人が学者として、読者であるすべての公衆の前で、みずからの理性を行使すること」だとカントはいう。この「学者」とは大学教員という職業上の地位ではない。職業上の地位に応じた理性の使用は私的な使用に過ぎないからだ。カントが言う「学者」とは、自由な言論空間において一個の市民個人として自由に自己の考えを述べる存在のことである。先の例で言えば市税係が税のかけ方や使用の仕方について自己の見解を公に市民に対して述べる（例えば新聞への投書など）ことである。

ある人ががまんしきれず、公に市民達に向けて発した一言に、他の人がそうかそう考えていたのは自分だけではなかったのだ、と孤立感から解放され、自信を持ち、自分も言ってみようという気になる。そうしたささやかな連鎖が、自由な言論空間を切り拓き、未成年状態に止まっていた人々が理性を使うようになり未成年状態から脱していくのだ。

あえて単純に表現してみれば、みんなが話しやすい雰囲気作りが大切だということだ。誰かが「異質」に思われるような意見を述べても、耳を傾け聴く。人は、聴かれることによって自信を持てるようになる。聴き手が自己の見解を否定しようとも、まずしっかりと自分の話を聴かれること自体が大切だ。他者の人格を尊重するということは、その人の見解を肯定することではなく、まず良く聴くことだ。聴くことによって、異なる意見が多様に存在しているという事実、それぞれの人々がそれぞれの世界観をもつ一個の主体であるという事実、に気づく。そうしてこそ、自分自身の存在を肯定し、主体的に考え、発言し、対話し、さらに深く考え、自己を豊かな存在にしていくことも可能となる。主体とは、他者に呼びかけ、他者の声を聴き、他者と語り合う関係の中でしか形成され得ないものなのだ。

改めて、大学における教育やキャリアサポートの意義とは何か。それは、どこかに就職させることを目的としているのではない。学生が将来どんな職業に就こうとも、「学者」として理性を公的に使用しうる力を身につけ、大学教員はじめ世間の大人達の言うことを鵜呑みにせず、自分で考え、自己の生き方をデザインしつつ自由に自己の幸福を追求し、この自由な社会を作りあげる市民となる援助をすることにこそ、大学の意義がある。

◎就職支援専用サイトでは、イベント、求人、就職相談、ガイダンス等様々な就職情報を発信しています。

<http://www.career.ipc.shizuoka.ac.jp>